

# 大学 インタビュー 4

## 佐賀大学

### 入学後の学生の活躍ぶりを踏まえて、高校での自主的な活動を重視した入学者選抜を実施

佐賀大学は、一般選抜で「特色加点制度」を設けるなど、高校での自主的な活動を重視した入試を行ってきた。そうした入試を経た学生は、大学でも大きく伸びているため、今後も現状の入試を維持する方針だ。

#### 高校時代の活動を評価する 特色加点制度を、一般選抜で導入

佐賀大学は、一般選抜で、高校時代の活動を評価する「特色加点制度」を導入している。活動の内容及び活動とアドミッション・ポリシーや大学入学後の学びとの関連を、それぞれ400字以内で記述した書類を提出すると、大学入学共通テストと個別学力検査の合計点とは別に、内容に応じて加点される(図)。書類の提出は任意で、「任意であっても提出しよう」という姿勢自体に主体性があると考え、評価している。実際、大学入学後のGPAやアンケート調査の結果を見ると、教科学力だけでなく、リーダーシップや自律性など

の資質・能力も、同制度を利用した学生は高い傾向だと言う。

ただ、高校時代の活動を入試で適切に評価するためには、学校推薦型選抜や総合型選抜で行う面接や口頭試問、書類審査、適性検査の精度を上げるべきだと、西郡大副学長は説明する。

「志望理由に加え、提出書類の内容を深める質問をするなど、面接を行う学部・学科が、その生徒ならではの回答を引き出すような問い方を工夫することが必要です」

また、入試では、生徒が活動に自主的に取り組んできたかを最も重視して見ている。入試に有利だから、教師に言われたからといった理由で活動に取り組んでも、生徒の力にならないと考えている。

「面接で高校での活動について聞くと、自主的に取り組んできた生徒は、伝えたい思いが強く、どんな言葉が出てきま

す。一方、受動的に取り組んできた生徒は、準備した内容しか話せず、突っ込んだ質問をされると、言葉に窮します」

大学の授業で課すレポートも、高校で自主的に探究学習などに取り組んできた学生は、自分なりの解

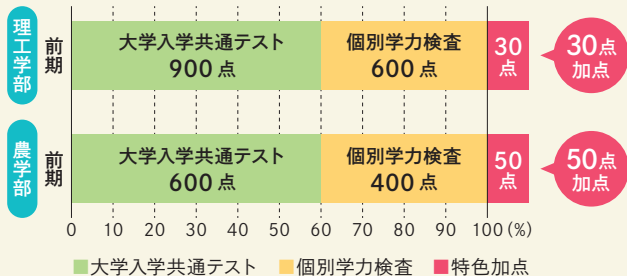
決策まで書くことができる。そして、低学年次からそうしたレポートが書ける学生は、踏み込んだ卒業研

#### 図 特色加点制度の概要

##### ◎申請できる活動実績の例

- 研究活動(探究型学習、課題研究、各種教育プログラムなど)
- 課外活動(部活動や生徒会活動など) ● 学校行事(担当した役割など)
- 社会活動(ボランティア、地域活動など) ● 資格・検定取得
- 海外留学経験 ● 大会・コンテスト(実績など)
- その他主体的な活動(個人的な取り組みも可)

##### ◎2023年度一般選抜の加点例(理工学部・農学部の場合)



※大学の提供資料を基に編集部で作成。

#### 2025年度入試情報(\*)

- ◎学校推薦型選抜や総合型選抜も含めて、基本的には現行の方針を継続。
- ◎大学入学共通テストを課す選抜においては、大学入学共通テストの「情報Ⅰ」を課す。2022年度内に、配点などを公表予定。

\* 2022年9月13日現在。



副学長、人文・社会科学域  
教育学系 教授  
**西郡 大**  
にしごおり、だい  
2022年4月から副学長。

究に挑戦する傾向があると言う。

「探究学習などについては、入試を意識して奇麗な結論にこだわり過ぎた取り組みは、必ずしもよい評価とはなりません。結果・成果だけではなく、何に関心があり、問題解決のためにどのような試行錯誤をし、失敗も含めてそこから何を学び、それを踏まえて大学で何をしたいのかを、明確に言語化することが重要です」

現在は、早期合格者にとって魅力的な入学前教育を検討中だ。学校推薦型・総合型選抜の合格者には、入学前に新しい学びに挑戦してほしいと、西郡副学長は語る。

「受験勉強中は学びへの意欲が高く、入学後の学びを具体的に描いていると思います。ところが、合格すると安心してしまい、学習が続かなくなる生徒が少なくありません。入学までの時間を使って大学で挑戦したいことを改めて考え

たり、その準備に取り組んだりすることで、入学後によりスタートを切ってほしいですし、ほかの学生により刺激を与える存在になってくれることを期待しています」

### 新設科目を中心に、従来の方向性でよいかを検討中

同大学は、2025年度入試について、大学入学共通テストでは「情報Ⅰ」を必須で課すこと（一部学部は選択）を始め、新学習指導要領で新設された科目の出題範囲について公表した。22年度内には、配点なども公表する予定だ。

「大学入学共通テストの利用に関する検討では、数学の出題範囲の拡大による受験生の負担への配慮や、高校における情報科の指導体制の現状を考慮し、『情報Ⅰ』の配点は当面大きくできないのではないかとという意見が出ました。今後、配点や科目選択の方法などについての議論を重ね、適宜公表します。個別学力検査については、新学習指導要領の内容を精査し、どのような方針で出題すべきかを

慎重に検討しています」

新学習指導要領の実施による、新たな入試の導入の予定はない。これまでも、探究的なものの見方や考え方、学びに向かう力などの評価を重視した入試を行っており、求める人材を選抜することができていると考えているからだ。

「入試を変えるのであれば、本学の学生として身につけるべき力を育成するための教育改革とともに行うべきでしょう。GPAやアンケート調査の結果などから、高校時代の活動と学生の成長の関係や、一連のカリキュラムによる学生の成長を継続的に見取り、それを入試に反映していきたいと考えています」

### リベラル・アーツ教育で学び続ける力を養う

同大学は、学士課程で身につけるべき資質・能力を、「基礎的な知識と技能」「課題発見・解決能力」「個人と社会の持続的発展を支える力」の3項目から成る「佐賀大学学士力」と定めている。それを

基に、各学部がカリキュラムを設計し、教育の質保証を図っている。

さらに、10年先を見据え、リベラル・アーツ教育を重視している。その1つが、1コース8単位で構成される「インターフェース科目」だ。「環境」「地域・佐賀学」などの7コースから1つを履修する。複数の分野を横断的に学ぶことで、視野を広げ、自分ならではの発想ができるようになることがねらいだ。また、同科目での学びを専門科目に生かせるよう、同科目は2年次後期と3年次に配置されている。

21年度に始めた「キャリア・アクセラレーションプログラム」は、社会人基礎力の育成と、キャリアデザインの明確化をねらいとしており、学生は、企業と仕事について語り合ったり、協働で創作活動を行ったりする。

「人生100年時代と言われる中、必要なのは『学び続ける力』です。大学卒業後も自分の課題意識や興味・関心に沿って学びを深めたり、広げたりするための土台となる、豊かな教養の育成に力を入れていきます」